

第六十四話 令和二年 一月八日

【沼津兵学校<五> 天朝御雇 {てんちょうおやとい}】

ご先祖さんが沼津兵学校と縁{ゆかり} あった拙者にとって
【沼津兵学校】は 語っておかねばならぬ明治維新の一隅である。

新政府から招聘され、応じた沼津兵学校の者を「天朝御雇」と呼んだ。沼津兵学校のみならず、静岡学問所をはじめ他藩からも少なくなかった。

その第一号が勝海舟。明治元年からはじめていたので、沼津兵学校が本格的にスタートする前に沼津を去った者もいる。

その一人、揖斐 {いび}。少佐に任命され、大阪兵学寮で鬼教官で鳴らした。上層部から評価されていたが、楠木正成を尊敬する朝廷兵士をあざ笑い、徳川遺臣のプライドを隠さなかった。

頭取（校長）西の片腕だった赤松は、西より先に天朝御雇になる。いやいやの出仕であった。沼津に骨を埋めるつもりであり、早々に辞職するつもりであったが、戻ることはなかった。

海軍中将から横須賀造船所長、海軍造船会議議長。明治22年開庁した佐世保鎮守府初代長官など歴任。明治20年に男爵。貴族院議員も務める。

民部省へ出仕を命じられた杉は、建白が認められず辞表を出し静岡へ戻る。廃藩後に再度徴命を受け上京。杉のように上京→静岡→上京を繰り返した者もいた。

廃藩後、天朝御雇は加速する。もともと江戸人であった。

幕府陸軍出身の教授は明治陸軍に横滑り。幕府海軍出身の赤松、判は幕府海軍から海軍省へ。

明治10年の役人名簿（官員録）。官員総数五二一五人、うち静岡・東京出身者一七五五人、約三四％。東京とあるのは静岡へ移住しなかった旧幕臣か、東京に移った静岡移住者。

軍人勅諭の草稿に関わった西、改易を提唱した塚本、国家による統計調査の主唱者となった杉、岩倉使節団に加わった田辺などいたが、勅任官・奏任官と判任官とに分けてみると前者の比重は低い。やはり薩長土肥に勅任官・奏任官は独占されていた。つまり明治政府の役人の中下級層は旧幕臣が支えていた。

沼津兵学校出身者で特に重用された数学。全国の数学教師の供給源となる。

測量や地図作成は、陸軍以外にも沼津兵学校出身者が最も力を発揮した。開拓もしかり。多くが北海道での三角測量に従事。

歴史に断絶などない。江戸幕府から明治政府へ「知力」はつながっていった。